

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 谷口けいさんを偲ぶ

谷口けいさんの死からおよそ一月が経つ。1月号の地平線通信<sup>注</sup>は、けいさんにゆかりの方による追悼文集の趣だった。僕自身、けいさんにはこの数年国立登山研修所の講師として、お付き合いしていただき、登山に関する大きな刺激をいただいた。もとより僕など足元にも及ばない優れた登山家だったが、何よりその人格が素晴らしい人だった。

一昨年、大町の山岳総合センターで、日山協国際部の山岳登山遭難対策研究会が開かれたときのことは、かわらばん514号に記載した。あの時はけいさんのほかにけいさんが姉のように慕っていたという登山家寺沢玲子さんもお見えになって、けいさんの海外登山を裏方として支える貴重なお話を聴くこともできて興味深かったのだったが、地平線通信には、その寺沢さんの悲痛な思いが切々と綴られており、心を動かされずにはいられなかった。その研究会のおり、貴重な機会だからとけいさんの話を大町高校の山岳部の女生徒Oさんにも勧めて聞かせ、紹介した。そのことを信濃毎日新聞が取り上げてくれた。翌日、けいさんとその新聞を読みながら、彼女に何かメッセージをと伝えるところ、気軽に応じてくれたけいさんは、コピーしたその新聞の空きスペースに、自らさらっとイラストを描いて、「Oさん 自分だけの頂上へ！！ KEI」というサイン入りメッセージを下さったのだった。Oさんは、当時はたった一人しかいない女子部員で、それまでは男子の中でつねに一步引いていたのだが、とにかくけいさんの話の内容に引き込まれ、その時以来けいさんを目標に「いつかは海外へ」と山にのめりこみ、男子にも伍して、現在は立派な女子部の部長として活動し、後輩にも慕われている。けいさんが一昨年、女子大生とネパールの未踏峰に登ったニュースにも興味を示し、「自分も大学生になったら一緒に海外に行きたいと密かに思っていたのに・・・」、先ごろけいさんの死を知った彼女はそんなふう僕に語り、あこがれていたその気持ちを伝えてくれた。

去年、全校登山で槍ヶ岳山荘に泊まったときは、たまたまそこにあったDVDが、けいさんのガイドする北鎌のそれだった。生徒と一緒に視聴しながら、先生はこんな人と知り合いなんだねと声をかけられ、誇らしい思いこそすれ、悪い気はしなかった。登山研修所では、同じ研修会でけいさんは登攀班を、僕は読図班を、それぞれ担当していたが、半分冗談交じりにお互いに研修生になりたいねと言ったりしたが、僕がけいさんの講師をつとめるなど考えもつかないことだった。しかし、僕の思いはまじめだった。一度はけいさんの登攀への思いを聴きながら研修を指導してもらいたいと思っていた。

地平線通信編集長の江本嘉伸さんのいう通り、「ずん、と心に空洞ができてしまったような喪失感」はぬぐえないし、まさに「日本にかけがえのない命」だった。

僕などがけいさんのことを書くのはおこがましいが、その生き様の一端をでも知ったものとして、彼女の生き方や考え方を知らしめることは生き残ったものとしてのせめてもの供養だと考えてあえて書かせていただいた。ぜひ、一人でも多くの人に地平線通信に文章を寄せた方々の思いを共有していただきたいと考える。

地平線通信は会員へは郵送されるが、ウェブ上の <http://www.chiheisen.net/> で読むこ

とができる。世間ではいろいろなことが言われているが、地平線通信には、けいさんのことを本当に知っている人たちのけいさんへのことばがたくさん書かれている。ぜひ多くの人に読んでもらいたい。

\*ご存じない方のために (地平線会議 HP より抜粋)・・・地平線会議は、探検・冒険から登山、旅、さらには民族調査やボランティア活動まで、世界を舞台に活動を続けている行動者たちのネットワークです。発足は1979年8月。設立当初は、大学探検部・山岳部の出身者をはじめ、国内・海外のフィールドでの体験をかさねた人たちが中心メンバーでしたが、しだいに一般の人たちの参加も増え、現在では、ごくふつうの勤め人から主婦、リタイア組まで、多彩な顔ぶれが活躍しています。会員制をとらず、事務所も置かず、会則もないなど、あくまでも個人の集合体であるという立場をとっているのが、大きな特徴。すべての活動が、有志の手弁当によって運営されています。1979年9月から毎月欠かさず発行されてきた「地平線通信」が、各メンバーを結ぶ唯一のきずなです。当初はガリ版刷りの葉書でスタートしましたが、86年の第75号からB5版4ページのワープロ打ちというスタイルになり、現在はパソコンでDTPソフトを使って制作されています。地平線会議からのお知らせや旅先からの便りの紹介、エッセイ、イラストによるその月の地平線報告会の案内、前月の報告会のレポートなど、多彩な記事を掲載して、毎月10日過ぎに発行されます。全国に散らばる約500名の読者による通信費カンパによって支えられています。

## 冬の合宿準備・・・鷹狩山で体力チェックと雪上歩行・読図学習

12月に大町高校ホームグラウンドの鷹狩山(1160m)で、雪上歩行訓練をと試みたが、例年にない暖冬で果たせず、1月の鉢伏山でも同様の結果(かわらばん574号参照)でちょっと拍子抜け。来週の雪山合宿に向けて、一度は雪上歩行をと思っていたのだが、ようやく雪が積もった。そこで、24日(日)、鷹狩山で雪上歩行・歩荷訓練・読図の確認のための日帰りトレーニング山行を行った。

今回は、冬山に向けて負荷登山。重量は男子20kg、女子15kgとして、実施。登山口の大町公園(標高760m)を10時に出発。2名が欠席だったが、男子4名、女子3名それぞれが自分の体力に応じて自分のペースで歩いてそのタイムを計測。自分の普段の体力トレーニングの成果を確認するというのが第1の目的。僕も一緒にやったが、久しぶりの20kgの負荷とラッセルは、なまった身体には応えた。しかし、下部でも10cm、山頂付近では30cm程度のラッセルを経験する中で、生徒たちもそれぞれに自分の課題が見えたようだ。

下りは、登山道を外し藪山に分け入り、読図をしながら下った。偶然、同じ山域で登山をしていた県ヶ丘高校にも途中ですれ違った。鷹狩のような安全に活動できる里山は、高校山岳部の冬の活動場所として大いに使われてもいい。こういうフィールドがあったらぜひ紹介してください。お互いに交流することで、生徒たちに益すること大です。

\*昨年からは鷹狩山を使って体力チェックトレーニングをしています。このことについては、参考になる部分もあるかと思しますので、別の機会にご報告いたします。

